

徳島県立図書館蔵『古今和歌集伝授』解題と翻刻

日高, 愛子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/25269>

出版情報 : 文献探究. 48, pp.85-98, 2010-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

徳島県立図書館蔵『古今和歌集伝授』解題と翻刻

日高 愛子

一 解題

『国書総目録』に「古今和歌集伝校」と誤って記載される『古今和歌集伝授』なる一書が徳島県立図書館山口文庫〔1〕に蔵されている。

所蔵番号は、91113/アス/山口文庫。書型、縦二三・八×横一六・七糶。墨付一九丁から成る一冊の写本で、装丁は袋綴じ。白茶刷毛目紋様の表紙左肩に題簽があり「飛鳥井正二位橘雅俊卿／古今和歌集伝授」と墨書する。本稿では、この外題によって本書を『古今和歌集伝授』と称す。

表紙見返しに「飛鳥井正二位橘雅俊卿／古今和歌集伝授／授主大内義興」という記載があり、巻末にも、

正二位橘雅俊

文亀元年辛酉三月廿五日

大内権助殿

とあること、更に続いて記される奥書に、

天文五年八月八日 文上源宗迦入道判

此本乃事、大内義興御在京之時、飛鳥井殿御伝授之本也。而、

実成公建在山口之時、相良氏俚依入竟写之者也。努く不可及外見也。

右以高橋右衛門尉証平写之記〔2〕

とあることから、この書が、大内義興（二四七七―一五二八）が上京の折、文亀元年（一五〇一）三月二五日に、飛鳥井雅俊（一四六二―一五二三）より伝授された書であったことが知られる。天文五年（一五三六）の奥書によると、義興相伝の後、この書は、相良氏へと相伝されたようであるが、「実成公」なる人物（未詳）が山口に健在であった時分に相良氏所蔵本より書写したものであるらしい。

一方、本書とは別に、既に井上宗雄〔3〕・米原正義〔4〕両氏によって紹介されたことのある東北大学狩野文庫蔵『古今秘訣』〔5〕の巻末にも、

文亀元年辛酉三月二十五日 正二位 雅俊

大内権介殿

天文五年丙申八月八日

源宗迦入道

以高橋右衛門尉本写之訖 带刀左衛門尉長次

延寶二年甲寅冬十一月 日以如上證本写了

可謂有神授者也

如松子謹記

とあって、文龜元年三月二五日という伝授の日付及び天文五年八月八日の奥書とが本書と合致しており、両書が併せて飛鳥井家から大内家へ、更に大内家家臣へと相伝されていった経緯を認めることが出来る。

さて、この『古今和歌集伝授』は、所謂『古今相伝之次第』と称される秘伝書の内容を記したものである。『古今相伝之次第』については、三輪正胤氏⁶⁵による詳説があり、その系統は、①灌頂流系、②二条流系、③冷泉流系の三系統に大別できるといふ。違いとして、①灌頂流系には目録があり、それぞれの秘事を初重から七重までの階梯法式にしているが、②二条流系、③冷泉流系にはこうした目録類はない。内容はいずれも大差ないようだが、②二条流系には、此一巻、為二条家甚深書、就内縁之品、以起請文之上、令恩借書写畢。千金莫伝、堅可秘者也。

前権大納言藤原朝臣 在判

という二条家相伝の旨が記され、③冷泉流系には、

右此書者、自俊成卿家、伝来冷泉為相。此灌頂唯授一子之大事之書、家々為深々秘之本、堅努々他見不可許者也。

として冷泉為相へ伝来の旨が記されているといふ⁶⁶。

今回採り上げた徳島県立図書館山公文庫蔵『古今和歌集伝授』は、「古今相伝之次第」という目録題に、初重から七重までの階梯による秘事の目録が記されるなど、三輪氏の分類に従えば、①灌頂流系に位置付けられるであろう。①灌頂流系のもは、既に稲賀敬二氏によって稲賀氏所蔵本二本が翻刻紹介されている⁶⁷のであるが、氏の所蔵本と本書の内容には若干の相違が見られる。

ここで、三輪氏の掲げる三系統に、稲賀氏所蔵本二本と本書を含めると、次の如くなる。

① 灌頂流系

天理図書館古義堂文庫本

静嘉堂文庫本

彰考館文庫本

京都大学図書館本

国文学資料館初雁文庫本

稲賀氏蔵A本（氏が「古今秘事相承之来由」と仮称するもの）

稲賀氏蔵B本

徳島県立図書館山公文庫蔵本『古今和歌集伝授』……飛鳥井流

② 二条流系

内閣文庫本

書陵部鷹司宮本

大阪女子大学図書館本

③ 冷泉流系

三康文化図書館本

このように改めて各系統を整理してみると、ここには飛鳥井流・二条流・冷泉流の関係を垣間見ることが出来るであろう。二条家にとつて「甚深書」として強調する②二条流系と、これに対抗するかの如く「俊成」「冷泉為相」の実名を以て冷泉流の系譜を掲げる③冷泉流系。本書は、こうした二条家と冷泉家の拮抗に対峙すべく、両家とは別系統の①灌頂流系の形態を以て飛鳥井流として相伝されたものである。

注

- (1) 山口文庫は山口家寄託資料である。
- (2) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期編』（風間書房 一九八七年）第一章・2 「飛鳥井家の動向―宋世と雅俊と」二〇頁。
- (3) 米原正義『戦国武士と文芸の研究』（桜楓社 一九七六年）第五章・第三節一・1 「大内歌道史上の義興」六四六頁。
- (4) 東北大学狩野文庫蔵『古今秘訣』は、『古今和歌集三条抄』『古今和歌集灌頂口伝』『玉伝深秘卷』の他、「冷泉家読方次第」等の秘事の合綴本である。猶、拙稿「飛鳥井家の古今集注釈と秘伝―蓮心院殿説古今集註』『古今集雅抄』の三木三鳥を中心にして―」（『国語国文学研究』第四五号 熊本大学文学部国語国文学会 二〇一〇年二月）では、『古今秘訣』に収録された秘伝と飛鳥井家の古今集注にみる秘説との関係性について考察している。
- (5) 三輪正胤『歌学秘伝の研究』（風間書院 一九九四年）第四章・第一節・一―二(2)「相伝次第という名の書のこと」。
- (6) ②二条流系、③冷泉流系の奥書は、前掲書（三四五―三四六頁）の三輪氏の引用による。
- (7) 稲賀敬二「古今伝授・秘事の輪廓―古今秘事相承之来由」（仮称）解題に代えて―、稲賀敬二・森川泰雄「資料翻刻「古今秘事相承之来由」（仮題）」（『王朝細流抄』第二集 安田女子大学古代中世文学研究会 一九九七年一〇月）

二 翻刻

【凡例】

- 一、改行・改丁は原本に依り、改丁箇所には「1オ」のように示した。
- 一、用字は、原則として現行字体に改めた。
- 一、読解の便宜をはかり、句読点・濁点を私に付した。
- 一、誤字・脱字と思われる箇所には右傍に（ママ）と付し、判読不能の箇所は■で記した。

飛鳥井正二位橘雅俊卿

古今和歌集伝授

「表紙題簽

飛鳥井正二位橘雅俊卿

古今和歌集伝授

授主大内義興

「表紙見返し

古今相伝之次第

初重 文字附詞之説

弐重 題歌儀附作者口伝

三重 三木并三鳥之大事

四重 七首之秘事

五重 七ヶ之大事

六重 古今二字附撰者口伝
七重 一首之深秘附三首之秘哥

以上

灌頂唯授一子之大事

三木并三鳥

第一相生の松

高砂住の江の松をあひ生の松にと有。問云、是は程遠所、何ぞかならず高砂住の江と云にや。答云、高砂とは上古万葉の歌をさして、住の江とは当代の歌を云。合て一部なれば相生とかく。松は千歳をふる様と言ふ義いへる也。高砂と云に古をあふぐ響あり。住の江といふには、彼御神、此道の長者にておはします上、住吉と申つきて、目出度と聞ゆればなり。すべて此集の体たるを相生のやうにとかける也。

第二をか玉の木

此事、説々多し。京極黄門に正儀をすこしかきゐて、それを秘せんがために、かたのゝ鳥付柴の事にいひなぞらへ給へり。抑、をか玉の木と申は、天子御即位時、三笠山の松を長サ五寸廻り五寸に削て、御守を朱にて上に書て、綿に包て、御胸にかけ、此を御即位の後、天子の生気の方に御宝物を添て埋置也。是に安陪・賀茂両家の陰陽の間の一大事也。柳にて

「1オ

作例も侍にや。松を用に付て、をかたまの木と申。玉は物をほむることば也。是を天子の御年木と申也。又、正月人民の門に年木とて立も此木になぞらえて立也。新年の神を迎奉て、人々今年に移さだまるいはひ也。其程にしめ縄を引、松を立ていはふ也。これ等、皆、をかたまの木なるべし。をか・をか両説共に不苦。

第三 めどのけづり花

此事、京極黄門、葦といふ字是也とばかり出されど、又、遷草とかくともいへり。又、めどゝは花瓶の事など申。心ふかく秘し給へるなるべし。めどとは妻戸といへり。花とは造ばな也。后などおはします妻戸には削花をかざしにさゝるゝ事有を、めどのけづり花と書也。

三鳥

第一 呼子とり

或、猿也。或、鶯也。舌雀也と申。所々に読ならわせり。近代の歌に、

法親王覚澄

■布引百首

布引の瀧みむとてや呼子鳥此山中に絶す鳴らん

順徳院

■歌

なげや鳴忍の杜の呼子鳥終にとまらぬ春ならずとも

「2オ

「1ウ

「2ウ

東路のなこそその関の呼子鳥何につくべき我身なるらん

中納言順時

人かげもせぬ物ゆへに呼子鳥何と鏡の山に啼らん

二条院讃岐

よぶこ鳥鳴音ぞいと哀なるは、その杜の暮かたの空

津の国の待かね山の呼子鳥など今そとは云ふ人のなき

かやうの証歌ども多侍也。但、当流には、はこ鳥をも。

是、春の鳥。此集の春の歌に入によりてなり。昔、

大唐人の子、春の山に入てかへらざりければ、

其親、尋入て、わが子くと呼べどもあはず、歎死に死て、

其魂鳥に化て春山に鳴に、わが子といふを、はこといふ也。

わこにて侍べきにや。是表の義也。裏に秘する所は、

称徳天皇の御在位の時、賢王にておはせしが、仏教

をたうとび給ひて、大乘経を講じさせらるゝに、女人

姪乱男にいかほどもすぐれて侍よしを聞召て、我女人

の身なれども全さる事なし、扱は仏語は皆虚妄

なりとて、大乘経を御目の前にて焼捨させらる。

其炎に自尿を仕懸させ給ひければ、程なく身

例ならず、姪乱の心出来させ給ひて、公卿殿上人

めしよせく姪事をおこなわせられけれども、御心

ゆかずして、世にこへたらん大根をと尋させ給ひければ、

あるもの、河内国弓削と申所に道鏡とてめでたき

聖のおはしますこそ大根にて侍れと申ければ、やがて

勅使を遣してめしよせらる。此人、御寵愛は斜

ならず、余のことに太上法皇の尊号をくだされて、

弓削の法皇と申。此僧、本より和哥上手にて

おはせしが、召上られて、其時の心をよみ給る哥也。

是、風の歌なるべし。

をちこちとは遠近と書。たづきとは便也。山中とは

大内山をさす。おぼつかなくも呼子鳥とは、称徳天

皇我をかゝる玉楼金殿によびあげ給事の不

思議さよとよめる哥也。其程に呼子鳥とは、人皇

四十六代に孝謙天皇と申せし御門也。 神の

御時、称徳と皇号をあらため給ふ。是女帝の御門也。

此道鏡というは、蛇祇道天之法を行て、心中に思ひけるは、

願は今生にて十善万乗の宝位にひとしくたのし

まばや、後生にては無間悪趣におつともと思ひ給ひて、

おこなはれけるに其法満願の朝にいたりて、夏の事

なれば聊昼寝をせられけるに、蜂と云毒虫飛び来

て、道鏡の玉茎をさしける程に、苦痛悩乱申に

余有。其種はれふとりて生付のやうになりしによりて

の事也。彼人を猿丸大夫と付るは作者也。其おもて、聊猿

に似たる面ざしなるによりて也。丸とは皇号にちなみでの

事也。大夫とは無間成人なればと云心也。此義、家々深秘

なり。

「 3ウ

第二 稻負鳥

或、山鶏。或、雀。或、鶉。或、馬杯と申。当家には鶉鴿を

「 3オ

「 4オ

本とす。

あふ事をいなおほせ鳥の教ずは我は恋ぢにまよは

ざらまし。色々の説侍れども、此道は陰陽をむねとす。

此鳥、陰陽の道を教侍し鳥なれば、是を用に

こそ、いなと云詞に陰陽と云響を(脱文カ?)の響有。其程に

陰陽を教鳥と云を、今いなをふせ鳥といひならはせ

るべし。此事一子より外に不伝也。

云帖

はやはこへ刈田の面の駒の足稲負鳥の声いそぐ也

神の田よりは馬に稲おふせて村里に道は馬を稲負に

と云説の歌也。

小夜更て稲負鳥の啼けるを君がたゝくと思ひける哉

此歌は、千兼を待けるにござりければ、よみてやると

あり。

神の田の稲負鳥のこかれはも木葉出なす露や染らん

此歌ひとつに鶴也。

万葉

鶴といふ稲負鳥の鳴比はこちの雁も思ひ立らん

此歌を証歌にて、こかれ羽の哥はよめるにや。

垣生なる菊のしげみにかくろひて稲負鳥の声のけちかな

すゝめてふ稲負鳥のなかりせば門田の稲を誰におほせん

此等、雀とみへたり。

我門に作る山田の色付て稲負鳥の声すだくなり

是等は雀といふ儀に叶たるにや。定家卿は、人は亦鳥共

雁ともいへる家の説はとの給へり。彼陰陽の響、努く

他家にしらすべからず。

第三みやこ鳥

是も所々に読り。

ふなきほふ堀江の川のみなぎわにきいつゝ鳴は都鳥かも

かもめのやうにて、ちいさくて白き鳥也。

公明

舟とむる難波堀江にきぬるなり声は高津の都鳥かも

こしの海に群つゝゐるは都鳥宮古の人ぞ恋しかるべき

八十嶋の都鳥をば秋の野に花見て帰るたよりにぞみる

古郷をこふるね覚の浦風に声なつかしき都鳥なれ

思ふ人あるに付ても都鳥哀今はとの船長

かやうに読る類共多し。此、名にしおはゞの歌は、業平

二条の後の事によりて、東のかたへくださるゝとあり

けれど、忠仁公の御はからひにて、東山のほとりにかく

れて住し比読る也。

武蔵国とは、長良公、其時武蔵国の国官也。おはし

ますによりていふ。下総国とは、忠仁公の御めぐみに下総の

下官を得て侍ければ、我すめる所をさして申。法成寺

の邑の角田の里とてあり。宮こ鳥とは陽成天皇を申。

業平こもりゐる中、清和天皇御即位有。日は暮

ぬとは清和の御事、渡し守は関白を申。船にのれとは

陽成の御めぐみにあづかれと云心也申。日は天下を照

し給ふ徳有。舟は万人をわたす徳有。其程に陽成母公

にておはしませば、二条の後のありさまをばしるしめす

「 5 オ

「 4 ウ

「 5 ウ

「 6 オ

らんといふ心也。実には、陽成は業平の子にておはしましけると也。

此歌も風の歌也。委は伊勢物語に印。

四重 七首之秘事

此歌は三国和合のことはり侍る也。誠に大和うたといふにかなへり。先、春夏秋といふに、秋の季を除て三季によめる。二月十五日にあたる也。可秘々々。天竺の真言、大唐の詩文、吾朝の和歌、姿各別也と申ことども其心一也。其程に仏経の内証にも叶、鬼神の心をもやはらぐる也。

第二 春日野の飛火

とぶ火とは烽火と書。天智天皇、春日野に烽火をあげさせ給ひしより、かの野をとぶ火の野と申とかや。野守とは野を守人也。但、家の説には、昔、大和国に有ける僧ひえの山の児と契を結びけるが、共にはかなく成し時、其兩人葬道の火ともに虚空に飛合て一に成てきへぬ。夫より年々此火飛也。或は、ひえの山より飛来年も有。其有様につけて年
の吉凶を里人占によりて彼野に出て、是をみる
を飛火の野守と申なり。今幾日ありて若菜摘てん
とは野を守ものなれば、若菜の生出る様はしるべきに
といふ心也。抑、若菜の事、天智天皇、吉野の奥に
住給ひし時、仙人、若菜奉る。是は七種の若菜と申て

「 6ウ

「 7オ

めでたき草也。正月七日比、若菜をきこしめせば、不老不死の妙薬にて侍也。此七草は則天の七星の七草、今下界にあらはるゝ性也。人として七星の性うけずと云事なし。されば、まのあたりに此七種をなむれば七魂をかたく養て命の根本を助養儀也。その七種、
芹・菜川・莉・はみ・御形・すゞ代・仏の座、以上。
又、あざみ・すゞな・又、九種、しやうじんとて今二種を加へて九耀のほしをかたどる也。それは源氏物語の説也。此集には七草を肝心とす。七星は、
貧根・巨門・禄存・文曲・廉貞・武曲・破軍
以上。

又、七星は四方に名七星あり。合て廿八宿とす。其時は名各別也。只、七星と申は北斗の七星を本とす。是、衆生の元、命元辰、そなわるなり。

第三 芳野河岩波たかく

此歌、貫之、事にあたりて土佐国に住し比、隣国なれば讃岐へ罷しに、ある川を見て人に其名を問ば、吉野川とこたふ。其時、彼大和の吉野河を思ひ出し、都の空も恋しくて、かく詠る也。
人とさす人は可尋也。はやくもとしはうちつけてのこゝろ也。又、或説、久しくより思ひそめてきといふ儀あり。其時は、彼川は大和の説也。
家くは、只、讃岐に芳野川といふ所を秘也。

「 7ウ

第四 おもひ出るときはの山

此うたは平定文がうた也。長良中納言の息、経つとむの

大納言、北方は在原棟梁女也。定文、忍てかよひけり。或時、定文、時平の大臣にまいられけるに、大臣、今天下に美人といふ女は誰ならんとの給ひければ、定文、我心に思ひける儘、国経の大納言の北方とぞ

承れと申。さて其後、国経、時平の大臣へ訪にまいられければ、左大臣仰けるは、そこに方違に出侍らんと有。国経、なめならず悦申されて、出だれて秘ひにせ有か九けは其程にかた違におはしけり。さまざま、馳走本意申されて例の琵琶・琴など奉る

程に、左大臣、是はつねの事也、同は北の方対面申さばやと仰られし程に、頓呼出して酒宴有し

に、酩酊の時、左大臣、今夜のひき出物に北方を給らばやと仰ければ、国経、子細有まじと戯れ申されければ、頓御車にかきのせて帰給。国経は酔

臥給ひて能もしらざりけり。酔醒て北の方は尋ぬれば、左大臣殿に引出物にと申。其時、興さめ歎悲しみ給へども甲斐なし。其程に定文も此程は忍びて

かよひしにと今より後は及がたければ、こひかなしめども力及ばぬ事也。せめてのことには、常に左大臣殿に参

かよひけり。年経て後まいりけるに、五六歳斗の若君の出で遊び給ふをみれば、さながら彼北方の面影也。余の事に指を喰切、血を出し、此思ひいづるのうた。又、昔せし我兼言の悲しきはいかに契し名残成

「 8 オ

らん 此うた二首を若君の腕に書て、母上に見せ奉れとすかしければ、かひく敷は教の儘見せ奉る。其時北方もいまさら物悲しく思ひ出るふしかくもおほくて、同腕に返事を書てつかはず。現にて誰契けん定なき夢ぢに迷ふ我は我かは定文これを見て、いと物思ひもまさりて、終に墓なく成。彼兒は後に敦忠の中納言といはれし人也。彼一首は後撰集に入也。

第五 月やあらぬ春や昔の歌

此歌は、凡、灌頂の大事とも申べき事也。かの業平は兒にて弘法大師の御弟子真雅僧正の御房にそひ奉りし也。その童名を方茶羅丸と号す。是、併此人、真言に天然戒道の穢有によりて付給る也。

其程に即身成仏の内証にて両部の秘法をさづけ、不転肉身密教を授て、無漏の法をしめさるゝ也。其程に生仏不二の大日とさとりをひら

かし人成によりて、其説給ふ歌にも其心とも多頭れたり。先、東の五条あたりとは五条洞院なり。大后の宮とは染殿の後の御事也。清和天皇の国母

なり。西の台に住人とは二条の後の御事也。是等皆、表の儀なり。其内証をたづぬれば、東のと云は、発心門をあけて五条たりと云に、五条唯識の浄土をさしてしめす。西と云に、菩提門をあけて弥陀の宝国を

「 9 オ

「 8 ウ

「 9 ウ

おしへたり。又、あばらなるいたじきと云心は、^ア ^ハ ^ハ ^ハ
なる也。是をば本有の大日也。其程にあはらかに
の内証をもて寂光土をさしていふなり。此時は
五条わたりとかく所、則、五大和合の当体なり。

地水火風空をもて無漏の法をさとする心なり。月
やあらんとは、表には去年の月にてはなきかと

いひ、又、二条の后を月にもたとへたるにや。裏には
本覚真如の月をさす。春とは、久遠実成の春を

云。今、我身は即身の大日なれば、本覚の月、久遠
の春と無二無三の心なるによりて、有らんと云は隔

ぬと云ころ也。此歌、伊勢物語に委見えたり。抑、
方茶羅丸と付し事は大日丸と云心也。万茶羅には

九耀の曼茶羅、如意輪曼茶羅、其外諸事
につきてさまざまなれども、先、両部の表相を両界の

万茶羅と申。中にも灌頂の教曼茶羅を大日経
正体とす。夫、大日とは五大を申。五大は地輪を以本とし、

空輪をもて正体とす。其程に教曼茶羅、則、両部不
二の大日なるによりて、業平の名に付、又、業平と云実

名も此心也。一切衆生は身口意の三業也。流転は
此三業を三密に納れば仏教に至。此人は因果平

等にして業障をつくしたるによりて業平と申。因とは
地水火風空、各因位の当体、胎藏理曼の心也。果とは五大

和合の当位、金剛智曼の心也。因果平和なる時、三業、
又、三密に帰する也。山河大地草木国土、惣別同異、終他

10才

物々あらず、百性天然の教万多羅也。其程に住吉に参
詣申されければ、明神直に出現有て、此人に詞
をかはし給ふ。太神宮へ参給ひては、齋宮をおかし
奉る。是則、天照大神一体不二の謂をしめさむが
ためなり。此事は一子より外に不可授也。

第六 我みても久しく

天安元年正月二八日、文徳天皇、住吉へ行幸の

時、業平供奉して玉櫃に跪てこのうたを詠じ

ければ、魂天にかけり、惠風心底に涙しくて、即、玉

扉をおしひらき給ひて、赤衣の童子現給て、

むつましと君は白波瑞籬の久しき世よりはひそめてき

此時、玉伝・阿古根浦^{に直に敷}、業平給られけると申。但、我

みてももの哥は文徳天皇の御詠吟有。むつましとの歌の沙

汰なし。其後、参詣申されし時事ども思ひ出して、

住よしの岸の姫松人ならば幾代かへしと、はまし物を

かく詠る時、老翁の婆にけんして、

衣だに二つありせば赤はたの山にひとつはかさまし物を

かくあそばして、玉伝等をさづけ給とも申。但、家の説

には、只、われとてももの歌を詠じと申。此あかはたの歌、神

功皇后の異国より帰朝のとき、志賀明神に

向はせ給る時、志賀明神は四十八艘の御船に各出現て

赤はたをさし楫を取給しによりて、赤はたの山

と彼嶋を申也。其程に、業平一期の後、かの玉伝をば

太神宮へおさめ奉り、阿古根をば二男の滋春に

10ウ

11才

11ウ

伝へたり。かくて、延喜帝御時に至て、御夢の告に任せ
小車の錦の袋を太神宮へ奉し時、勅使ふるき
御袋を給て帰まいりければ、彼袋の内に此玉伝
あり。其時、帝はじめて和歌に一大事有事をしるし
めして、かの貫之等に仰て此集をえらび給ひて、
この度の説の奉幣とせられし也。其程に、われみて
もの歌は、八代集の根源と申にや。

第七 いざこゝに我世は

このうたはさまざま注す。すがはらのふしみとは大和、たゞふしみは
こわたのほとりに見えたり。

すか原やふしみの暮に見渡せは霞にまかふお初瀬の山
此うたなど二儀にあらず。ふしみより御初瀬不可見也。顕照法師
申はいざこゝにこの歌は伏見仙が歌歟。天台恵心院の僧都の

勸女往生義をいへる物かゝれしに、長井の侍従、今ぬきの少将、
伏見の翁など云物語とあり。但、家の説に深秘に申所は、

「12オ

菅少将にて聖廟配流に赴給とてあそぼしたる也。それ

天神は天照太神の御出現にておはします間、国土を守、

万人を哀まんと思しめす御心ざし不淺に、かゝるうき名に

遠国に赴き給心を悲しみあそすなり。菅原やとは御身

をさして読給ふ。伏見の里とは日本をいへる也。凡、此国は

伊弉諾尊ふして見給ひて、此下に国なからむやとて、さか

ほこをくだし給によりて、爰をふしみといへる也。あれ

まくもおしとは、我この帝都になくならば、たれか王

位をたすけて国土をあはれまんと思しめしける也。

濁世に生まれあひ給ひて、かゝる御身と成事は、誠、日
月の蝕にあつるごとくなるべし。此時、山城のふしみ
とも大和ともわけかたし。唯、吾朝の惣名也。可秘々々。

五重 七筒大事

第一 ちはやぶる神

種々の説、一には千磐経。是は天照太神の岩戸
を引はなちて、手力雄の明神天照太神を出し

たる。よりて千磐経と云也。この手力雄は春日の御社
に高く祝へる小社は也。又、其時の手力男は住吉

にてわたらせ給ふと申説も有。可尋也。三には茅

振。彼天の岩戸にて諸の神達、幣を立庭火を

焼、茅の葉を鈴に取そへて、舞きぬをちはやと申、

茅の義也。四には千銚振。天岩戸にこもり給ふと云。

素戔雄尊のかたがまの御神達、天照太神、下界

にくだし奉らぬ様にとて、千の銚をならべて拒を奉る

といへども、天照太神あま下り給ければ、をのづから千の

銚もやぶれて叶給ひ成し事を申て、天照太神、一

足にけやぶりと見へたり。五には茅葉屋古と書。

これ、天照太神、垂仁天皇の御幸、伊勢国、渡

会郡に祝奉るより以来、かやぶきにて廿一年に茅か

ゆることのふりぬるを申。ちはや振神とは、伊勢よりはし

めて申、此神をあぐれば諸神達おはしますなれば、その

心にかよふ。此義、当家の秘事。

「13オ

「12ウ

第二天も身をあはせたり

君も人もと書時、君臣とかく。但、君とは聖武天皇をさして申。人とは人丸を云也。彼御心一にして和歌の道に入給て、堪能世にたぐひなくおはします事を身をあはせたと云也。又、人丸とは聖武の御事、作者といふせつあるにや、不可用。其外、人丸の伝に相応せざる事共おほし。聖武は聖観音の化身、人丸は弥陀の化身なる事、聊しめさんとて、かくかけるをや。勢至と申は、(ミツ)誰、弥陀一仏の理智を文殊と申、其理を普賢と申。全一体上の表裏なり。極楽にては一体の御身なるが、今娑婆示現は二人と見えたり。御心に和歌の道に入ぬる事を、かく身をあわせたと云。同体異名の説は用べからざる事なり。

第三 赤人は一子の伝授、別紙にあり。

第四 衣通姫

是は応神天皇の御子、雅淳毛二流王の御女也。御肌雪のごとくにてきぬにひかりとをり給によりて、衣通ひめと申とかや。人王廿代、允恭天皇の后に成給。大和国明日香の宮に居す。わきもこがく(わがせことも古今にあり)べきよひなり。さゝがにの蛛のふるまひ兼てしるしも。このうた、允恭天皇を待給てあそばしける也。其後、光孝天皇、御悩の時、ある暁の御夢に紅袴着給へる女房の

「 13ウ

けだかき姿にてあらはれて、立かへり又も此世に跡たれんその名うれしきわかの浦浪、と説給ふ。いかなる人ぞと尋おはしければ、われはこれいにしへの衣通姫と答ふ。御驚有て、仁和三年九月十七日、勅使、左大弁源澄行卿をつかはし、紀伊国和歌の浦玉津嶋に社を造、信回上人をして勸請申さる。それより以来、住吉・玉津嶋とて左右つばさにて、この道の守護神たり。住吉に彼御神の社ましくぬる事、社家秘曲也。又、彼衣通姫は七夕に衣をかしたまへる。其衣、天上に吹上ければ、七夕にかしつる衣の程もなくあまの衣となるぞ嬉しきとあそばしければ、天より梶の葉一ふりくだる。其を御覽ずれば、歌に、君に今朝かりそめ衣我にきてあまのなくさとかへしやる哉とありしより、衣を通するひめと申と云り。但、家の説には、七夕の事は淡路の廢帝にておはしなり。衣通姫にあらざと申。其まこと委可尋也。

「 14ウ

第五 日おりの日

是は家にも秘し給ひて、かりぎぬのすそをひき折、かちのしもをおりなど書り。北野、御祭のやうにあり。その義にてはなし。内侍所を右近の馬場におろしたてまつり奉るを申也。日神にておはしませば、日おりと申。是下化衆生の姿、和光同塵の儀也。車は二条の后也。みずも

「 14オ

あらずとは、車のみすよせて見ぬにもあらず見たるとも
いひがたしと云儀也。返事は、思ひの身こそしるべなるべけれ
と疑はぬ我なりと、こたへたるうたなり。

「 15オ

第六 みたりの翁

是は住吉の明神を申。其謂は、年久御神にて、代々の事
を見だし給と云儀あれども、家には、三人の翁と云儀を
用。家持・行平・諸兄、此三人の歌どもなるべし。

第七 ひるめの歌

是は神代の事なり。京極禪門明静も、此廿の巻
をば日月と共にほるかに鬼神と興をあらそふ
などあそばしければ、けにも凡慮の及がたき事
なれども、あらくそのはしくをも伝聞たる事共
にや。此ひるめとは靈姫と書り。又、大日賞貴とも
書。いづれも天照太神の御事也。天照太神の
御歌といはむとてひるめと申也。可秘々々。

六重 古今之一字

古今の事、我見てもの歌にいへることく、延喜帝、
天照太神より秘書を給りて、御喜の奉幣になぞ
らへて此集をえらび給。其程に、延喜已前の
うたをすべて古といひ、当代の前を今といへる也。
併、彼奈良の葉になにおふことの葉をいにしへとさし、
よるこびをのぶるのとの祝儀を今とさす。それ

「 15ウ

に十二の徳を含り。所謂、古に六義あり。それ古
の六義とは、

自古・空古・体古・性古・観古・諫古、是也。第一、
自古は、法身本有常住の法無転変をいふなり。

第二、空古とは、天地未分・陰陽未分・方域未分、

法界寂然たるをいふ也。第三、体古は、十界三千依

法正法無始無終の体、当位即妙本位不改の理を

そなふるをいふ。第四、性古は、性徳不思議の理の体、色

相質に出ずして、五音七声響に応、善悪是

非をのづからわかるゝをいふ。是則和歌の当体なり。

第五、観古は、天地陰陽の二法、亦、難三の諸法、五

七五の内不観と云事なし。万像和合。平等無差

の儀を観古と云。第六、諫古は、実体自性、賢賢固

なるを散して分別する故に暫諫古といふ。権化の方

便、応身の利生、是也。今、又、六義とは、天今・地今・形

今・静今・動今・光今、是等也。第一、天今とは暑

往寒来の四季、生住異滅の四相、日月星宿

の光耀をあらはず姿をいふ也。第二、地今とは金木

水火土の五行随縁真女の作用を云也。第三、動今

とは照故法界動散なるがゆへに心兔を四節の空

霧にとばしめ、句を上下にわかち字を三十一字につら

ぬる時、平静の水波浪をたて、しばらく物にふれるに

したがひて動揺するを云也。第四、静今とは寂故法

万、但一度なるゆへに四節を刹那に縮て、六義を心に

納て、五句にいまだあらはれざる処をいふ。第五、形今、五七五

「 16ウ

「 16オ

の体出現れて、法万象一首に伝をもて三世明

鏡なるをいふ。第六、光今は、凡、和歌表は狂言綺語の

戯と見ゆれども、裏は法身の諸法、衆生の言語、是

なり。道即自受、用知の内証、天真独朗の法門也。

一度吟すれば三悪道の輪廻を転し、刹那も是を

翫ふ。人は自身是仏の位也。其程に是をよみ是を

しる人は和光同塵心にひとしきを光今といふ也。

以上。又、廿卷にわかつこと、太神廿社、名神法楽の

ころなり。その廿社とは、

太神宮 賀茂 春日 稻荷 祇園

松尾 平野 貴船 熊野 住吉

三輪 玉津嶋 厳島 熱田 月夜見

大原 日吉 河名田 大山 原北

以上、社是也。又、廿卷の名にも其名目をつけたる。

春の上、ふるとしの巻。春の下、初花の巻。夏の藤

なみ。秋の上、初秋風。秋下、山風。冬、時雨。賀哥、さ

れ石。離別、浮雲。羈旅、もろこし。物の名、うぐ

ひす。恋の一、あやめ。あだゆめ。恋の三、おもひね。

恋の四、花かつみ。恋の五、おぼる月夜。哀傷、わたり

川。離上、うきふね。飛鳥河。雑躰、夕顔。大歌所御哥、

初春の巻。以上。撰者の口伝。大内記、紀友則は少納

言紀有明が子也。中納言長谷雄が孫。六十歳の時、

勅を奉、この秋の部迄撰て、延喜五年

九月一日五十七
二月十三日卒

六十一歳。仁明御時、嘉祥三年十二月廿六日生と云々。

紀貫之、紀文幹が二男。父、大和守長谷寺に参籠申、

「 17 〇

夢に妙典を給と見て、妻程なく懐妊す。十月にして

朝日の光口の内に入れば、立ながら生れたり。童名を

内教坊とつく。船橋僧正まいらせたり。拾四歳の時、勅により

て元服す。寛平元年九月十六日生。承平十三年

五月十八日卒、四十七歳。三十の歳、此集を奉て、撰し

給と云々。前甲斐少目凡河内躬恒、本は大中臣

氏也。行氏が孫、湛利の子。御厨所預也。四十六歳にて勅奉

同四十九歳卒。斉衡元年九月三日生。和泉権椽

に任す。延喜六年三月三日卒云々。右衛門府生

壬生忠峯、和泉の右大将定国の隨身。成氏の孫。

河内椽忠衡の子也。三十一歳の時、あかつきの別の歌にて

預叡慮、昇殿す。三十七歳にて勅奉、左京大夫に

成。九十四歳卒。元慶七年正月十一日生、天慶

二年九月三日卒。但、家々異説多し。経信卿、

住吉大神よりしめし給儀に曰、友則は天照大神の

化身也。其墓は近江音羽川のほとりに有なり。

貫之は住吉大明神の化身也。其墓は和泉国高

瀧と云所にあるべし。躬恒は春日太明神の化身。

其墓は四条大宮にあり。忠峯は賀茂大明神の

化身也。其墓、比叡山の麓にある也。延喜帝は不動

明王の化身。御墓、山城山あり。郷に在也。若不審

をなす人有は、其はかをほりて見るべし。五体

の骨いづれもみだれずして、其骨に皆其人

姓名あるべしと教へ給ふと云り。

「 18 〇

七重一首秘歌、并在別紙。

灌頂大事唯受一子之口伝也

正二位橘雅俊

文龜元年辛酉三月廿五日

大内権助殿

天文五年八月八日 文上源宗迦入道判

此本乃事大内義興御在京之時飛鳥井殿御伝授
之本也而実成公建在山口之時相良氏俚依入竟
写之者也努く不可及外見也

右以高橋右衛門尉証平^(マ)写之記^(マ)

※本稿をなすにあたり、資料の閲覧と翻刻のご許可を戴いた徳島県立図書館及び
山口家の方々に深謝申し上げます。

(ひだか あいこ・本学大学院博士後期課程)

レ 19
オ

レ 19
ウ